

その二 釜山港（プサンハン）へ

一九二二年九月一三日の早朝、和次郎は、景福丸の甲板で朝鮮半島が次第に大きくなるのを見ていた。三六〇〇トンの新鋭艦は、波を切り分けて快調に進んでいる。

和次郎こと、今和次郎（こん・わじろう）は、早稲田大学建築学科の教授。当年にとって満三四歳。全国の民家を調査しているが、このたび朝鮮でも調査を行うのである。

内地は仕事柄あちこちに行っているが、外地の朝鮮は初めてだ。内地の民家は、朝鮮や大陸の民家と大いに関連があるに違いない。一度行きたいものと常々思っていた。

一昨日の夕方、東京駅を発ち、昨日の夕方に下関駅に着いた。そのまま釜山行きの連絡船に乗り込み、三等席で雑魚寝をした。

珍しく眠りが浅かった。今回の調査に誘ってくれた小田内通敏さんは、隣でぐっすりと寝込んでいる。さすがに朝鮮行きは慣れたものだ。

小田内さんは、地理学と郷土学が専門で、最近は、朝鮮総督府から委託を受けて朝鮮の農村調査を行っている。和次郎と同じく早稲田大学で教鞭をとっている。柳田国男先生の紹介で知り合い、時々一緒に調査に行う仲だ。和次郎より十歳以上も年長なのだが、教授の和次郎に敬意を表する律儀な人である。

和次郎たちの近くではキセルを手にした白髪交じりの男性が青白い顔をした少年に小声で話しかけていた。

「お前さん、こんな揺れで参っていたらダメだよ。ちょっと前までは、この船の半分もなくて、もう揺れるなんてもんじゃない。この船は最新式で、息苦しくもなく座敷で足を延ばして寝られるし、まるで極楽だね。昔は、米の買い付けに沈没覚悟で玄界灘を渡ったものさ。」

「番頭さんが朝鮮に行くのは自分の家に帰るようなものですが、テイジは初めてですの
で。」

青年は、船酔いのテイジ少年をかばった。

「こんなんじゃ朝鮮では大変だよ。ご不浄だけでなく、街も人も不潔でね。食事も日本とは違う。しっかりしておくれ。」

「番頭さん、大丈夫です。内地だって清潔なのは東京だけです。内地も田舎は朝鮮とあまり変わらないです。テイジもオラと同じで東北の田舎出身です。朝鮮の米は内地よりウメーぐらいですよ。朝鮮人が不潔だと言っても、番頭さんだって朝鮮芸者をたいそう気に入ってるでないですか。確かウォルメだとか。」

「ゴン太、何を言う！若社長のお供だよ。人聞きが悪い。だいたい朝鮮じゃ芸者って言わないよ。キーセン（妓生）とって、ちゃんと専門学校を出て舞や謡の芸を見せるのさ。お前たちに言っても分かるまいが、京都の舞妓や芸妓のようなものだよ。お前達が付き合うような飯盛り女と一緒にしたらいけない。」

番頭さんは、周りをちょっと気にしながら真面目な顔で話をしていた。ゴン太の目は笑っていた。

日本人は、古来より大陸と日本をつなぐ朝鮮半島に向かい、多くの人命が対馬海峡に飲み込まれた。和次郎は海を見たいと思い、立ち上がった。

甲板ではもう十人以上の人が海を見ている。やがて右方向に岩礁が、左手には大きな島が現れてきた。その間を船は進む。朝鮮半島が盛り上がり、山々が黒色から緑色に変わってきた。山の下に街が微かに見える。

街は山々の真下に細く長く広がっている。小田内さんによれば、釜山は、朝鮮王朝と日本との交易場所、倭館（ウエガン）から発展した街なのだそう。日本人が埋立てを続け、現在の港と街ができたとのこと。

昨夜の船内のことがまた頭に浮かんだ。

乗船して三等席の真ん中辺りに寝場所を決めた和次郎は、ふと朝鮮人が端のほうに固ま

って座っていることに気付いた。いかつい男や学生が、まるで朝鮮人の婦女子を守るかのように座っていた。倍以上いる日本人乗客に押されて、他の場所にいた朝鮮人も静かに一か所に集まって来ているように見えた。

『朝鮮人と一緒は、いやだわ。』

流行の鬘（まげ）を結った日本人女性がジロジロと朝鮮人の方を見た。

『あいつら汚いし、何をしでかすか分かったもんじゃないからね。』

と隣の着流しの男が言った。

『心配いらねえ。日本人を恐れて何もできねえ。京城に行ったら電車に乗って朝鮮人が座っている前に立って睨（にら）んでみる。するとな、朝鮮人は黙って席を立つ。変な帽子を被った老人がいたら、帽子を奪って窓の外に投げてみる。何も言わないで、じっと下を向いているだけだぜ。』

渡世人風の男が言った。

『釜山も、やっと日本人の街になったね。昔

は朝鮮人の闇討ちをくらって死ぬ者もいたが、最近は何しい輩がいれば、かたっぱしから警察に通報すればよい。二・三日、痛めつけられて出てくれば、おとなしくなるからね。』

『京城も同じですね。憲兵はいなくなったが警官が多くなって、かえって安心できるようになりました。』

和次郎の脳裏から気持ちの悪い光景が離れなかった。日本人が朝鮮人を擲揄（やゆ）するとき、決まって何かに取りつかれた歪んだ顔になる。江戸っ子が田舎者を馬鹿にするときの顔も同じだ。弘前から上京した頃、津軽弁が抜けない和次郎が時々出会った顔でもある。

「今先生、よく眠れましたか。」

振り向くと、小田内さんが立っていた。

「間もなく釜山港です。船の速度がゆっくりなってきたでしょう？あの二つ突き出ているところが棧橋で、左側の方にこの船は向

かっています。間もなくですから船を降りる支度をしまししょうか。」

二人は甲板を歩き始めた。

「この船は新型なので時刻表より一時間も早く着くのですよ。旧式の遅い船と交互に運行するため、時刻表は変えられないようです。来年、新型船がもう一隻できれば、時刻表も変わり二時間以上も早く着くとのことですが。今先生、足下にご注意を。」

和次郎は、うなずいてゆっくりとタラップを降りた。

「昨夜、渡鮮する日本人たちが朝鮮人を露骨に馬鹿していたことがずっと引っかかっておりました。」

「そうですか。わたしも初めは気になりましたね。近頃はもう慣れてしまいましたが。我々のような白河以北の人間は昔から東京でそれなりの差別を受けてきました。朝鮮人の気持ちもそれなりに分かりますよ。」

ちよっと考えて小田内さんは話を続けた。

「京城では浅川巧（あさかわ・たくみ）という方に会います。日本人なのに朝鮮服を着て街を歩き、警察から取り調べを受けるような人ですよ。今回は白樺派を主宰する柳宗悦（やなぎ・むねよし）さんとも一緒になります。彼らにこの話をしてみてください。おもしろい話を聞けるはずですよ。

ともあれ、まずは旅館の風呂につかって、さっぱりとしまししょうか。」

和次郎は、うなずきながら三等席の雑踏に分け入った。

「ゴン太、一等席に行つて若旦那を起こしておくれ！」

「へーい！」

「あんた、もう起きなよ。船が着くよ。」

「うるせえ、まだいい！」

一斉に乗客が降りる支度を始めた。片隅の朝鮮人達は静かに接岸を待っていた。